

実験室

<p>実験室の中には焼かれたのだろうか焦げたような死体が転がっていて、全て死体は瓜二つの同じ顔だった。死体は鉄板の上で焦げているもの、舌を出しているもの、ガラス檻の中で首を押さえながら目を見開いて倒れているものなど。</p> <p>実験室内には鉄板、椅子、ガラス檻、緑色の液体の入ったプール(ここまでのものは移動可能)、資料棚、ワークベンチがあった。</p>	
資料棚	<p>実験記録、実験記録水晶、スケッチ、標本が入っていた</p> <p>実験記録 (魔法帝国語+暗黒語) 実験目的: 苦痛と極限状態への追い込みによる悪魔覚醒の可能性実験 炎上: 効果なし 一瞬顕現しかけるも肉体が耐えきれず死亡、廃棄 電撃: 効果なし 肉体のほうに先に破損し死亡、破棄 ガス: 効果あり しかしガスが強力すぎて悪魔の因子ごと破壊してしまったため、今後は毒素を弱めて使用する。使われた毒は神経毒のようだ。悪魔といえども肉体そのものが破損したり麻痺していれば役に立たないようだ。特にこのガスは純度が濃く、実験用の因子を破壊するほどの毒のようだ。(ただし人間にも猛毒)このガスは管理室にガスタンクがあり、それが使用可能。(ガスタンク自体はまだ確認していない) 実験体に刺激を与える際は暴走しても良いようにガラス檻に閉じ込めて刺激を加えていた。暴走した場合はガスが火炎放射で殺していた。(初期の実験体はG2ほどには強くなかったようだ)</p>
	<p>実験記録水晶(映像) 衝撃波の実験: ガラス檻に入れられた青髪の少女に黒い衝撃波を浴びせて、どうなるかの実験記録だ。最初のうちは悪魔化が進みすぎて暴走体以上の異形へと変貌したり、ショック死したりするものが多く、映像のほとんどが、見知った声の断末魔と悲鳴で作られている。最後の方になれば、ようやく衝撃波で安定して悪魔化が進む段階まで来るが、その個体のほぼ全てが暴走して処分されるという結果に終わっている。最後に、作成者のボイスメッセージで「実験は成功した。これで悪魔ピグマリオンの召喚は理論上可能だ。あとは唯一の成功体…メフィストフェレスの居場所さえわかれば…」という言葉で締めくくられている</p>
	<p>スケッチ おぞましいものが鮮明に描かれていた。実験の過程、結果、その後の処理まで、鮮明に描かれている。正気を疑う内容だが、きっと研究員たちは被検体を人どころか生物とすら見てないのだろう。</p>
	<p>標本 倉庫にあったやつよりもっと生々しいもの。変色した内蔵とか、両目とか、そういうレベルに。役に立つとは思えない。</p>
緑色液体	<p>緑色のメロンソーダ(強酸)。廃棄場所だと予測される。最初は硫酸に漬ける実験もしてたのだから、今は失敗作のゴミ捨て場に扱われているようだ。この液体で悪魔の組織を溶かすことは可能だが、悪魔が暴れなければという条件付き。このプールがごぼごぼ音の発生源だった。</p>
ワークベンチ	<p>作りかけの大型ペンシルミサイルが残っていた。ペンシルミサイルは先端に術式を組み込まれた魔導兵器だった。弾頭の魔法陣は暗黒語で構成された術式でソーサラーの術式ではなかった。術式は悪魔召喚の魔法陣の派生のようだ。悪魔を呼ぶ際に生じる瘴気、それだけを凝縮して召喚する。魔界の空気だけを召喚する魔法陣だ。その一帯にいる悪魔を活性化させる効果がある。このミサイルと緑色の液体を使って強酸弾頭ミサイルを製造することは可能だが、数時間を要する。</p>
実験室考察	<p>実験記録水晶にあった「メフィストフェレス」はガルムのことと思われる。 実験の成功失敗についてのルエルの考察。成功失敗の基準は確かに生存率などもあると思われるが…ガルムとアオバ達ガルムクローンで決定的な相違点がある。ガルムとアオバ達は 種族が違う。アオバはライカンスローブだ 他の実験の子もほとんどがそう。 神経ガスの一番有効で安全な運用方法は、実験室のような密室に充滿させること。 悪魔を加熱することそのものには何もないようだ ただ、細胞の活性化という意味では寒いよりは暑いほうが効果的だろう</p>

管理室奥

<p>薄緑色の光で照らされていて培養液のようなものが詰まったカプセルに入れられたライカンスローブの少女が蹲って浮かんでいる。それが数十個並んでいる。奥には操作盤のような機械がある。</p>	
研究員の死体	<p>研究員の死体は死後硬直していた。特に一部がガチガチ。白衣から薬剤が出てきた。薬剤の内容はアップードリンクとベスポーションが入った混合アンプルのようだ。使用すると好きなステータス+6&床上手の疲労なし、の効果を同時に得るが、副作用として軽い中毒症状を起こすようだ。</p>
カプセル	<p>10歳くらいの少女。歪な肉片が徐々に人に変わっている途中のように見える。少なくとも真つ当な生物の成長過程には見えない。容姿はガルムやアオバにそっくり。首から下は真つ黒に変色している。カプセルの培養液は主任室の培養液と同じ役割を果たすものようだ。培養液と培養器は何かを活性化させるためのもののようにだが、PTが持っている常識外のものだった。培養器に外から何かを注入することも培養液を取り出すことも可能。</p>
奥の操作盤	<p>奥の装置は本人確認用の生体認証センサーで守られていて、アオバに殺されたらしい研究員の死体を使って開けることができた。奥の操作盤でカプセルの操作ができる、操作盤には実験体の正常異常を示すものはあるが、詳しい内容はわからない。ただ、生きていけるとは思い難い。彼女らはまだ胎児のようなもので、肉体の形成すら終わっていない状態。実験体を解放するか安らかな死を与えるかを選択可能だった。解放しても実験体がまともには生きられる見込みはないため安らかな死を与えた。</p>
管理室考察	<p>カプセルの中の実験体を外に出して生きられるくらいに育成するには数週間ではきかない期間が必要になる。生命を犠牲にして成長速度を速めることは可能。 この子達にとっては生きるという実感は持っていない。彼女たちに生きたいという意志はなく、生かされているだけだ。そこに意味を与えるかどうかはPT次第。</p>